るものが残っている。義家は八幡岳の御坪石といわれるところにこもり、七つの石を北斗七星の形に並べて、戦勝を祈願したという。

そして、蓑輪山には蓑をつけ、笠ケ森には笠をつけ、高旗山には旗をたてて、多くの軍勢がいるようにみせかけ、新羅三郎義光の来るのをいまがおそしと待っていた。のちに新羅三郎義光の援軍や、清原氏の援助を得てついに阿部氏を打破ることができた。

源家では、のちのために備えて、沢山の軍用金を埋蔵したと伝えられる。

地図は竹筒に入れてあり、誰にもみせてならないという。文書には「滝において夕陽を背にあび、その時、源家に伝わる名器雲月満月はたらの笙を心ゆくまで吹くと、その時、音色が山間にこだまして、最高潮に達した時、かすかにみえるまぼろしの城」ということが書かれている。

八幡太郎義家が、滝の桑の木平に、軍用金を埋蔵した場所を示す一つの暗号であった。

のちに、源頼朝が石橋山で、一時敗戦の色濃いとき、源氏の勢力挽回を期して、村上貞行、小田桐八左ヱ門輝清という二人の御納戸役が、軍用金を掘るためにやってきた。そして二人は風穴という場所にこもり、軍用金を探索したがみつからなかった。

この二人の侍が地図を半分ずつもっていたという。近年、その埋蔵金の一部を探し出したというわさもある。

（話者　江連　栄）